

浄土

9
19

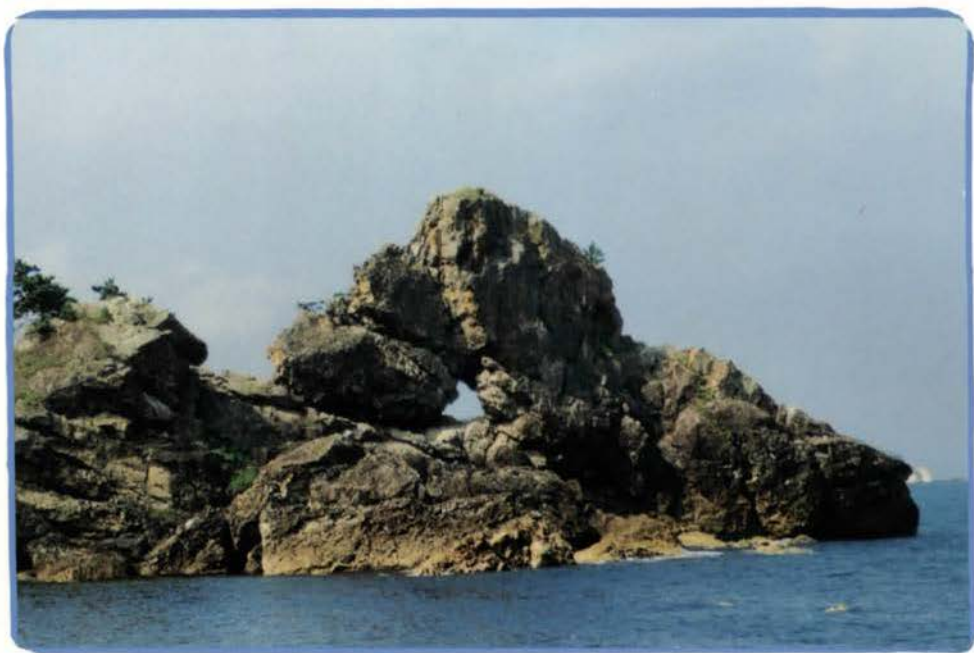
開教区ハワイからのメッセージ 鷺見定信

旅
夏 攸吾

好評連載
吉川英明 利根川 裕 稲葉小太郎

連載講話
須藤隆仙

終戦近き日に 紀野一義



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82(無料) / 0120-0088-82(無料)

受付時間 9:00~23:00(年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

能登、富来とぎの海

写真—夏 攸吾



富来とぎの海



富来漁港の朝



定置網の水揚げ



魚の選別、箱詰め



「鮮魚の宅配便」川辺茂さん



魚を選ぶ

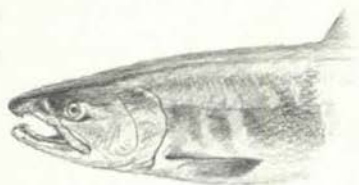


名勝増穂ヶ浦



増穂ヶ浦の歌仙貝

浄土



1994/9月号 目次

〔カラー口絵〕能登、富来の海……………写真＝夏 攸吾	3
開教区ハワイからのメッセージ……………鷺見定信	8
能登、富来の海から……………夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——⑧	
失われた歳時記……………吉川英明	24
利根川 裕のマイアングル——〈最終回〉	
読書巡礼……………利根川 裕	32
現代の快僧——その7	
山谷、寿町に飛び込め……………稲葉小太郎	38
念仏信仰の系譜—中国編—②……………須藤隆仙	50
終戦近き日に……………紀野一義	58
編集後記……………	70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影＝西海尚丸

目次・編集後記イラストレーション＝田村直巳

開教区ハワイ
からのメッセー
ジ

鷺見定信

ハワイでは日本と違って〈家族の宗教〉ではない。信仰は個人のものである。

オーバーな言い方をするならば、おじいちゃん
んは浄土宗の寺(浄土院)へ行くが、おばあちゃん
んは浄土真宗のお寺に所属し、長男はキリスト
教の教会に行くということもある。少なくとも、
おじいちゃん、おばあちゃんは浄土宗のメンバ
ーであつたにしても、子供たちはほとんどがキ
リスト教徒、もしくは無宗教である。浄土宗と
いう宗教伝統が家族の紐帯とはなっていない。
世代によって隔絶しているのである。とくに太

平洋戦争以降に。

「そういうことなら、日本でも同じではないですか。お寺のことはおじいちゃん、おばあちゃんやうていて、子供たちは無関心じゃあないですか。でも、いざとなれば子供さん達もお寺のことを一生懸命やりますから心配ないんじゃないですか」という見方も日本ではできる。しかし日本と違うのは、信者（メンバーという）を囲む文化状況の違いにある。異文化社会なのである。人類学の吉田禎吾は呪術の効果が現れる条件として（呪術）を行なう人が効果を信じて



いること、(呪術)を依頼する人が効果を信じていること、そして呪術師と依頼者を取り巻く社会が信じていることを三つの条件にあげている。呪術という範囲を超えて信仰のあり様を教えてくれるものである。この考え方を応用すれば、ハワイは日本とは文化風土が異なっている。日本であれば、仏教の意味も役割も人々のよく理解するところである。したがって信仰を説く僧侶も、それを受け止める信者も、そしてそれらを取り囲む人々(社会)も仏教の役割や意味、効果を信じている。しかしハワイでは違う。仏教寺院を取り巻く社会はキリスト教を中心とした社会なのである。

人種別の人口統計を参考としよう。

一九八七年現在でハワイの総人口は百四万四千三十一人である。(一九九〇年米国国勢調査ではハワイ総人口は百十一万五千二百七十人)

このうち非混血の日本人は二十四万一千六百三十七人(ホノルル：十九万七千七百七十六人、ハワイ市：二万五千八百十、カウアイ市：九千八十四人、マウイ市：一万五千九人)である。非混血の白人は二十五万二百二人で、人口の一位を占め、日本人はそれに次いでいる(但し、非混血人口も三十一万九千七十七人がおり、ハワイアンとの混血十九万九千七百七十六人、非ハワイアンとの混血十一万九千三百一人が数えられているが、日系の血を引くものの人口は明らかではない)。この数字から、ハワイが日本人の多い外国であることが知られよう。しかしながら、文化、社会の中心的な位置はアメリカである。ハワイの日本人(日系人)を取り巻く環境は、様々な意味でアメリカなのである。この現実ハワイの仏教寺院に困難な問題をなげかけている。

ハワイへの伝道

ハワイに浄土の教えが渡って百年を迎える。

明治二十七年（一八九四）三月十六日に横浜港を出帆した松尾諦定がホノルルに到着したのは同月二十五日であった。ついで五月十四日には岡部学應が三尺有余の阿弥陀仏像を供奉して来布した。この二人によってハワイ浄土宗の基礎が作られたのである（岡部が奉持した尊像は現在のハマクア浄土院の本尊であろうと推測されている）。その後、オアフ島、ハワイ島、カウアイ島、マウイ島の四島に十七の寺院（ハワイでは教会所と呼んでいる）が設置され、多くの信者の拠り所となったのである。例えば一九二七（昭和二）年には檀家二三六四戸（五千六百七三人）、信徒二九一五戸（九千九百二十人）と記録されている。この当時（一九二七―一九三七）の

日系人人口は十三万五千人から十三万七千人とあるから約一割の信者を獲得していたのである。

寺院だけではなく、学校（日本語）もあった。

というより、寺院よりも教育活動が目立っていた時期もあったのである。したがって寺院の前身が学校の場合もあり、そうでないときもほとんどが学校が付属施設として設置されていた。例えば、今は閉鎖されているが、オアフ島にあったエワ教会所には四恩学園があり、社会事業まで行なっていた。

そのハワイ開教区が百年を迎える。十月には式典が予定されている。喜ばしいことである。しかしハワイを知る人達のなかには、この百年を複雑な思いで受け止めている人達も多い。これまでのようにハワイ開教区は存続していくのだろうか、という不安である。ある元開教使は「一人の信徒が亡くなられたら、檀家が一軒減

るんだ」という。信徒として寺を支える人が一人減り、新しい信徒は生まれてこない。三世、四世の日系人はアメリカ人として生きている。寺院（浄土ミッシヨンという）の信徒にはなっていない。したがって、一人のメンバーのお葬式はその寺院の葬式でもあるととらえるのである。実態は確かにそのとおりかも知れない。もしそうならばその原因はどこにあるのだろうか。そのことを知るためには過去を振り返る必要がある。

日本人移民の統合的役割

ハワイの開教の目的は日本人移民への布教にあった。布哇宣教会事務所の「布哇宣教の趣旨」によれば、移民たちが宗教上浮浪の民であること、風紀が乱れること、キリスト教化の恐れがあることなどをハワイ布教の理由に上げていた。

またその理念に従って松尾、岡部を専任布教師として送ったのである。日本移民のための布教という主方向は一貫して変わることはなかった。確かに浄土の教えに関心を持つ人種の異なる人もいたし、現在でもメンバーとして存在している。しかしそれは例外である。なぜならば布教の対象は日本人であり、異文化に生まれた人達のための布教方策が組まれることはなかったからである。個々の寺院では対応してきたことは事実である。しかしそれがハワイ開教区として、浄土宗教団としての組織的な営みにつながっていかなかったことを指しているのである。

「身命財を捨てても、ひとえに浄土の法を説くべし」（『黒谷源空上人伝』）は法然上人のお言葉である。このお示しによって多くの開教使は海を渡ったことと思われる。しかしそこにあるのは同じ人種、同じ言葉を話す人々、そして同じ国

家に属していた(属している)人々であった。この点においてハワイの各寺院が果たした役割は大きなものであった。井上順孝氏はこれを魔法瓶効果と名付けた。たしかに日本人としてのアイデンティティは守られた。寺院は日本人のセンターであった。この意味で日本人を精神的にも実質的にも統合するという役割を果たしてきたのである。しかし、それゆえ異文化の人々への教化体制をとりにくかったことも事実である。

二世はアメリカ人

ハワイに定着した日本人移民も変化が生まれた。最も大きなものは二世問題である。一九一〇年には一万九千八百八十九人の二世が一九二〇年には四万九千十六人に増加している。彼らは公立学校に進学し、同時に日本語学校に通うという二重の教育を受けていた。日本で育った

一世とは違った教育を受けてくるのである。それでも日本人社会が彼らを包んでいた。日本語教育が寺院や独立日本語学校で行なわれていた。そうした環境が日本人の自覚を支えていた。

当初は「錦衣帰郷」を夢みて三年の契約が終わったなら日本に帰国することが大方の望みであった。しかしハワイを永住の地にしようとする人々も増えてきた。プランテーション(耕地)から都市に移り、生活も安定しつつあった。ハワイの移民史研究家ジャック田坂によれば、生活に余裕のできた日系人家庭では子弟を日本に留学させることが流行したという。一九三七年はそのピークであり、約二千人の子女が日本に渡ったという。日系二世の大半は二重国籍の所有者であったから、排日問題(アメリカによる日本人移民の排斥運動)を背景にしてアメリカ化を志向した日系公民協会などは日本国籍離脱

運動を起こし、一九二五年から一九四一年までの日本国籍離脱運動の賛同者は三万人に達したという。日本とアメリカ、その狭間の中で日本人かアメリカ人かの選択は主として二世の重要課題であった。

しかし太平洋戦争を境にして、ハワイの日本人（日系人）の状況も大きく変わってきた。真珠湾攻撃の夜、大半の日本人宗教者はホノルル移民局に收容され、後にアメリカ本土に移送された。アメリカ本土では日本人と日本人の系譜にある日系人はリロケーションキャンプと呼ぶ強制收容所に收容された。しかし総人口の三割を超える日系人のいるハワイでは收容することとかならず、指導者階層が抑留させられたのである。戦争の終結と共に宗教者たちも戻ってきた。しかしそこは新しいハワイであった。日系二世の若者達の多くはアメリカ（ハワイ）人としての

自覚を鮮明にしていた。日本とアメリカが戦ううちにハワイの日系人はもう一つの戦いを行なっていたのである。日本人として日本の側に立つべきか、アメリカの人間としてアメリカの側に立つべきか、という困難な選択であった。二世の若者達の多くはアメリカの軍隊に所属した。それがハワイに生まれた第百大隊（一九四二）である。この前後にアメリカ本土のリロケーションキャンプの鉄条網の中にいた日系二世もアメリカ軍に入隊していった。四四二戦闘部隊である（後に第百大隊と合同）。無論これに反対し、日本に帰国したものもある。鉄条網の中に残ったものもある。しかしアメリカ軍に従った若者達は日系人がアメリカに定着するため、もつといえはアメリカに受け入れてもらうために自らをかけたのである。そしてその戦闘は全アメリカ軍の中で最も高い評価を得たのである。それ

に應じて最も多くの死傷者をだしたのであるが。長く続いた排日運動もこの「犠牲」によって贖われたのである。こうした内なる戦いは日系人のアイデンティティに変化をもたらした。自らの意識においても、アメリカの人々の評価においても日系アメリカ人として自立したのである。

仏教の社会参加

このことは浄土宗の海外布教の基本的な問題を語っているのである。信者の変化は寺院の在り方に転換を求めたのである。日本という文化風土の中に培われた方法と違って、アメリカ社会の文化風土に適応した方法が求められるのである。家の宗教、先祖祭祀という日本宗教の中心的なテーマはわかりづらくなり、個人を意味付ける宗教、もしくは社会に参加する宗教が求められたのである。それゆえハワイやアメリカ

の開教使はアメリカ仏教を提言するのである。具体的な例としてあげれば、ハワイ大学のジョージ田辺助教の社会的仏法の提言である。現実的な方法によって人々を救済する、という方向がハワイの仏教が生き残る道であることを語っている。教義や儀礼はそれが形成されてきた「特殊な」文化に規制されている。しかし国際化、普遍化のなかにあるハワイにおいては個々の宗派の独自性を超えて、人間の苦しみを和らげることに、救済することに指導力を発揮すべきことを述べている（『日本仏教の再生』）。

社会への参加、つまり教団の社会的役割を見直すこと、これが寺院の一つの方向であることに教えている。このほかにも道は開けるだろう。しかしいずれにしろわかっていることは、三世、四世の新しい世代にいかにもアプローチするかである。これまでと違うのは（布教）対象が異なる

ることである。普遍的な意味での「個人」人間を対象とする方法論に切りかえる必要があることを指摘したい。

幸いに浄土教は三心に示されるような、普遍的な人間観を基盤としている。この人間理解に立ったうえで、教化方法の樹立が開教区ハワイの再生への一つの道であろうと考える。

ハワイの問題は日本での問題

ハワイの問題はハワイ固有の問題として問われるものであろうか。ハワイの問題は同時に日本における問題でもある、と想定できないであろうか。私は個人的なハワイとの触れ合いの中で終始感じていたのはこの想いであつた。具体的にいえばハワイの状況はこれからの日本の状況ではないだろうか、という点である。家の宗教の衰退、個人の宗教の台頭、先祖祭祀の変化、

寺檀関係の変化、生命倫理・環境問題などの解決など、ランダムにあげてみても国内寺院・教団を取り巻く諸問題は、ハワイの問題とも共通している。ただ、ハワイの場合はそのスピードが早いだけではないだろうか。

チエーホフの『桜の園』のラストを思い出す。愛した桜の園の桜が切られていく。その音はかすかに、そして次第に大きくなっていく。ラネーフスカヤ婦人は没落していくことを知り、泣き沈む。しかし桜の園が切られていく音を聞きながら明日に生きることを決意する娘もいる。今私たちは、ハワイの現状を正確に把握すること、そしてそこにみられる諸問題が何を語っているのかに耳を澄ますこと。そうすることによって伝わってくるメッセージがある。多分だれもの耳に聞こえていることだろう。

(浄土宗霊山寺住職)

能登、富来とぎの海から

文と写真 夏 攸吾

海からの恵みそのままに
「鮮魚の宅配便」

梅雨の晴れ間の早晩五時、富来漁港。
水平線から顔を出したばかりの、まだ眠そうな赤い太陽を背に、まずイカ釣り船が帰ってくる。白い発泡スチロールの箱に納まって船から運び出され

わが国最古の木製灯台、富来町福浦(下)





定置網の魚の選別

る、イカの水揚げ風景は静かに、港の朝の序曲を奏でる。

箱のなかは、大きき揃えたスルメイカのきれいな整列。丁寧な扱い方が、流通市場をカッチリ意識している。漁師が操業中に済ませる箱詰作業は、機械釣りになつてずいぶん楽になった。魚を獲るだけではない、鮮度を保つて港に揚げるまでが、漁師の仕事だ、稼ぎに関わる。

能登のスルメイカ漁はもうじき終わり——イカも回遊するから——日本海の漁場は、東北から北海道方面へと移っていく。

荷捌きの係に声をかけ、イカの箱をいくつか貰い受ける老齢の男が、ひとり。地元、西海漁協の元組合長、川辺茂さん、七十歳の動きが緩やかだ。

続いて定置網の船が入り、こちらは船倉から大きなたも網での水揚げ、港にいつもの活気がみなぎってくる。このあたりで「ふくらぎ」と呼ぶ天然ハマチ、タイ、トビウオ、カワハギ、小アジなど、さまざまな魚種。

岸壁でてきばきと仕分けされていくなから、川辺さんは次々によさそうな魚をみつくろい、確保していく。釣り漁で獲れた形のいいタチウオを見つけて、これも手に入れた。

川辺さんがおもいたって「鮮魚の宅配便」を手掛け、「海と漁師の顔が見える魚」を送り続けて、十一年になる。覚えておいでだろうか。

昨年の八月号で、この人のことに少しだけふれた。そして、改めてまた川

巻網にサメがかかっていた



辺さんの魚の話をしよう、とお約束しておいた……。

しんがりの入港は巻網船団。川辺さんの人待ち顔が、後を継いだ息子さんの船を見つけ、「まあまあ大漁」の報告に、ほころぶ。口数少ない男同士、父子の笑顔がいい。

腹のあたりを金色に輝かせた、みことなサバがドッサリ。「惜しいことしたなあ、こんないいサバが入るとわかっていたら、フクラギを買うことはなかった」。川辺さんが苦笑したのは、いったん引き受けた魚を、返すわけにはいかないからだ。宅配便で送る魚の量は決まっている。

ところで、この巻網船の水揚げというの、凄まじい。太いパイプで海水

ごと船倉から魚を吸い上げ、魚体の大きさを粗仕分けをする装置をとおして、選別台になだれ落とす仕掛け。生きた魚が、まるで工業製品かなにかのように見えてくる。それでも、大事に氷詰めされる市場価値のある魚はまだいい。飼料に加工されるのか氷も使ってもらえず、無造作に箱に放り込まれる小イワシの大群もある。

「乱暴なもんでしょ、海の恵みなのに……。息子には巻網をやめてほしいんですが、船の設備を換えるには金がかかりますからね」

川辺さんはそういつて、背を向けた。「いちばんいけないのは、小魚まで根こそぎに獲ってしまう底曳網です。大きく育つ魚を……もつたない、漁師



だつてそんなことわかつてるんですが、やめられないんですね、なかなか、海にやさしい漁法は釣り漁ですよ、餌に食いついた魚だけ獲るんですからね」

魚にも逃げるチャンスが与えられれば、生きのびた魚が海の資源を守ってくれる。

漁協組合長の時代に彼は、細かくなる一方の網の目を、小魚を逃がすために少し大きくすることを提案したが、

無視された。

まっとうな考え方をなくさせたのは、市場経済だ。売ればいい、高くたくさん売れるほどいい。平和ボケにマヒして無知な消費者も悪い、買えればそれでいいと思ってる。

ほんとうは、生命の糧の食料を商品とすることが、罰あたりなのだ。

「他人ごとじゃない、私もかつてはそうでした、漁師は金儲けのことばかり考えるようになって、恵みの海を大切にしなくなりました、金がないと食べていけない世の中ですが、じつをいうと、金は食えない、んですよね」。

母が遠くにある子を想うように……

富来という町は、能登半島の日本海

川辺さん父子



側、外浦のなかほど、能登金剛の名勝で名高い。

古くは、サクラ貝やニシキ貝など色も形もとりの、美しく種類も豊富な歌仙貝の増穂ヶ浦で知られ、いまはそこに世界一のロングベンチが造られたり、リゾートエリアの開発が進む。

私にはこの町に、湖月館という常宿がある。

厳冬、外浦の風物詩といえば、波の花、風に舞い散る磯での岩海苔採り。

素朴な海苔鍋に能登の海の精気をかぐのが、とりわけ好きだ。旅の好きな方は、この宿の名を覚えておかれてよい。

その湖月館の女将も尊敬する川辺さんのお宅で、朝飯を招かれた。けさ獲れたばかりの、イワシの焼いたのにア

ジの刺身。これが、うまい、なんとも申しわけないくらい、うまい。獲れた魚をおいしくいただく、あたりまえの食事に、目からうろこのはがれる想い。

川辺さんは、まさにこの獲れたての鮮度を、われら一般家庭の食卓にも届けようという。おわかりでしょう、私らが日ごろ店で買う魚は、もつともつと余計な遠まわりをして、かなり鮮度の落ちたものだ。果たして、それは仕方のないこと、だろうか。

川辺さんは、次男を亡くしている。

「助かるはずの病気を、自分の不注意から助けることができなかった」と悔やむ。死の間際に、「信じていたのに、といわれました、愛する息子のこの言葉に、うちのめされました」。



「鮮魚の宅配便」の魚を選び、計量する



この過酷な試練をきっかけに、川辺さんには人間の、魚の、あらゆる生き物の生命が見えるようになり、そうして生命と正面から向き合うことになった。海は、魚は、なにか、だれのものか、「魚を殺して金を儲ける漁師」とは、なんなのか、それが必要以上に……。

そこで川辺さんは、「海も魚も、自分らや、いまを生きる消費者だけのものではない、将来を担う子や孫に残すべきもの、勝手に食いつぶすわけにはいかない」ことに気づく。

隣りの志賀町に能登原発建設の動きがおきたときには、「海を売るな」と阻止運動の先頭に立った。しかし、途中経過はいろいろあったが、結局、保償金で海を売り渡すことになり、川辺

「鮮魚の宅配便」の箱詰め



さんは組合長をやめた。

市場で買った魚を、都会で暮らす我が子に送る母親たちを見て、「鮮魚の宅配便」をはじめた。消費者から届く「漁師さんへの手紙」に勇気づけられ、一時は同調者がかなり集まったが、町も漁協も冷たく、そのうちにいつのまにか熱が冷め、面倒くさくなつたのか数が減つて、いまでは川辺さん一人だ。「原発反対の変わり者がすること、とすっかり白い眼で見られてしまつて、いまでもそうですよ」といいながら、川辺さんはけれどもいつこうに怯まな^ひい。その情熱に私など、気おされるばかりで恥ずかしい。

朝飯のあと、荷造りにかかる。漁協の冷蔵庫に一時保管しておいた魚を、発

泡スチロールの箱に分け入れていく。

「氷が溶けるように、鮮度も落ちますからね」

たっぷりの氷枕を敷いた上に、いちいち目方をはかりながら。というのは、宅配便用に買い取る魚はその日その日の相場値に一割増し、この値段を送り先に別に割り振らなければならないからだ。

魚を扱う川辺さんの手つきがやさしい。ほかの人のやり方が乱暴とはいわないが、消費者に向かい合う意識の人と、そうでない人との差はいかんともしがたい。箱一杯に魚がきれいにおさま^るり、梱包される。

もうだれもいなくなつた港の日陰で、手間暇かけておよそ三十分、きょうの発送先は十二軒。失礼ながら隠居仕事、

分量のチェックをする



だが、「この動きにもっと弾みがつけば、いくらでも工夫はできるし、漁師の意識もきつとちがってきます」と、川辺さんの信念は固い。

こういう人を放つといちやいけない、大事にしなけりや……と私は思う。まっとうでありたい食生活は、消費者が

もつと賢くならなければ実現できない。現在ある流通機構に疑問をもち、産地と消費者の気持ちを通わせようと努力する人を、支援しないで食文化なんぞあるもんか。

この際いわせてもらえば、現代の宗教にしても、「死」よりも切実で厄介な「生」のテーマに、対処できなければ意味がない。食うために生きるのではない、生きるために食うのだが、この食の問題に知らんぷりというのは、衆生を欺くことではないか。いま鎮魂は、生ある人にこそ……と想われるのに……。

ヘメモ「鮮魚の宅配便」川辺茂（電話）0767-45-1114、湖月館（電話）0767-42-0026。

午後の日差しの中で

〈第八回〉

失われた歳時記

吉川英明

暑い暑いと言っているうち、ふと気がつくと七月も半ばを過ぎていて、東京のお盆は終わっていた。

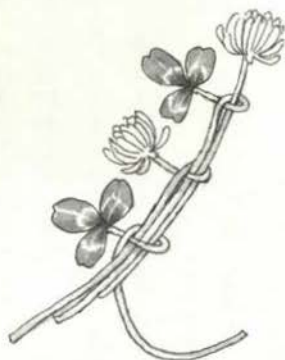
淡い淋しさが心をよぎる。

お盆というと「お迎え」「お送り」の行事が原風景として私の心に焼き付いているのだが、我が家でもそれをやらなくなつてから、もう久

しい。

過ぎ去った日々への郷愁と、失われていく伝統的な風習への惜別とが重なって、こんな気持ちになるのだと思う。

お盆の行事は、その土地によって、やり方も千差万別らしいが、我が家のそれは父の生地、横浜か東京の風習だろう。



七月十三日の迎え火には、夕方、玄関前を掃き清めて打ち水をし、地面に置いた素焼きの焙烙の上に、短く折った苧殻を燃えやすいように組み上げる。

焙烙の左右には、鮮やかな色をした胡瓜の馬と茄子の牛とが並べられ、水に浸した萩の葉の束が脇に添えられる。

箒目の立った地面の上に設えられた素朴な道具達の佇まいは、子供の目にも清楚で涼やかだった。

火をつけると、苧殻はすぐに、ちろちろと朱色の優しい炎を上げ始め、柔らかい煙がうつすらとたなびいて微風に乗る。

「ほらほら、煙に乗って、お祖父ちゃんお祖母ちゃんが帰ってらっしゃった」

同居していた叔母が、この場面になると、毎

年同じことを言っていたのを思い出す。

炎が鎮まると、父から順番に萩の葉の束を水から抜き出して、したたる水滴を二、三度熾火の上に振り掛けてから合掌し、焙烙をまたいで向こう側へ行く。

家族全員がそれを済ませると、家に入ってまた仏壇を拜むのだが、叔父や叔母は、決まってその前に焙烙の熾火で煙草に火をつけ、うまそうに吹かした。

「お迎えの火で煙草をつけると、何かいいことがあるんだよ」

そう言いながら、煙に目を細める叔父の横顔を眺めながら、早く大きくなって、この火でつけた煙草を喫ってみたいと思ったのを覚えている。そして、十六日の夕方には、同じような設えで送り火を焚いた。

午後の日差しの中で

私が、小学校時代を過ごしたのは、西多摩郡の吉野村というところで、今でこそ青梅市に編入されて東京といっても違和感はないが、当時はまだ都心からはかなり遠隔の地という印象だった。

吉野村の周りの家庭では、どんな形でお盆の火を焚いたのか知らないが、幼心に残る鄙びた行事は他にも色々あった。

二月には初午があった。

これは小学校低学年のころの一度か二度の経験なので、細かいことは覚えていないのだが、村の稲荷神社の境内に作った筵小屋に、初午の晩、子供達数人で籠らされたことがあった。

私より大分年上の子も何人かいて、筵で封じられた空間の裸電球の光の中で、ただ何となく何時間かを過ごしたのだが、夜、子供の感覚で

はかなり遅くまで、大人抜きに表にいるという体験は初めてのことだった。

それだけに、異様に興奮した記憶があり、そのときの筵の感触が、妙に生々しく掌に残っている。

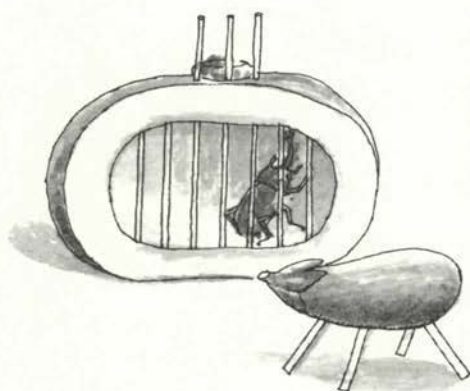
四月になると、八日の灌仏会が楽しみだった。子供達は「お釈迦様の日」と呼んでいたが、その日に近くのお寺に行くと、本堂の縁先に設えられた台の上に小さなお堂が飾ってあって、中に天上天下を指差したお釈迦様の像が立っている。

小さな柄杓で甘茶を掬い、お釈迦様の頭からかけると、御像の肌が黒々と濡れて一際光った。私達の狙いは、この後にいただく甘茶だった。熱くもなく冷たくもない、生ぬるい甘茶の微かな甘みは、戦後までもないころの私達子供の舌に

も、まさに甘露だった。

初午や灌仏会とはちよつと趣が違うが、真冬の夜の「火の用心」も懐かしい。

これは、小学生も高学年になってからだが、



子供達が数人ずつグループを作って、当番制で見回りをするのである。

白い息を吐きながら、ずしりと重い樫の拍子木を打ち鳴らすと、氷のように硬質な音が短く鋭く響いて闇に消えて行く。続けて打ち鳴らすうち、消えて行つたいくつもの音が、そのまま空中で凍りついているような錯覚に捕われるのだった。

三、四十分辺りを回ると、身体の芯まで冷え込んで震えがくる。

そんな時、家に帰り着くと待っていた甘酒の舌を焼く熱さは、未だに忘れない。

こうしたさまざまな行事が、これほどまでに遠く過去のものになってしまったのは、何故なのだろう。

お盆の「お迎え」「お送り」は、父が死んだ後、

午後の日差しの中で

母がマンションに住むようになってからも、何年かは続けていたと思うが、それも、いつのころからかなくなつた。

家族がそれぞれに別れて住み、慌ただしく時間に追われて過ごしている現代の東京には、こうした風習はそぐわないのだろうか。

自分がやらなくなつたのを棚に上げて、こう言うのも憚られるが、こうした傾向は何となく淋しいし、どこかが間違っているような気がする。

というのも、私の幼いころからこれまでのわずか数十年の間にも、日本古来の行事が次第に消えていく反面、外国のそれが次々に紹介されて定着してきたからである。

最初に親しまれたのは、やはり、クリスマスだろう。

日本で、一般家庭でもクリスマスが祝われるようになったのは、明治からのことらしいが、戦後まもないころ既にクリスマスは、私達子供にとって、一年のうちでも正月と肩を並べる楽しい日となっていた。

その後、クリスマスイブに銀座や新宿の盛り場で酔漢達が乱痴気騒ぎをした一時期を過ぎて、今やクリスマスは年中行事として完全に定着した。

考えてみれば、この日本で、お釈迦様の誕生日が忘れられ、キリストの誕生日が盛大に祝われるというのは、真におかしな現象なのだが、日本のクリスマスというのは、今や宗教とは完全に切り離された商業的なお祭りなのだと説明されれば、別に目くじらを立てることもないのかとも思う。

だが、このクリスマスより、ずっと後から入
ってきて、ほぼ根付いてしまったのがバレンタ
インデーだ。

昭和三十三年に発行された東京堂の『年中行
事事典』を見ると、「英米では、恋人どうしが
贈り物や恋文を送る習慣があり（中略）わが国で
も最近一部に行われ始め、バレンタインセール
などの広告も見掛けるようになった」とあるか
ら、クリスマスと比べれば随分と新しい。

それが何時のまにか、この日は女性が男性に
チョコレートを贈る日ということになり、
「ギリチョコ」などという奇態なものまで流行り出
した。この「ギリチョコ」には、会社勤めの女性
が職場の男性に贈るものから、バーやクラブが
お客に配るものまでさまざまな性格のものがあ
り、最近では貰ったほうも当たり前のような顔

をしているが、私など、毎回、

（何なんだ、これは……）

と、麗々しく包装されたチョコレートを改めて
見詰めてしまう。

これも、クリスマスと同じように、商業的な
お祭りさ、と片付けてしまえばいいのかもしれ
ないが、業界やデパートの音頭に踊らされて、
若い連中が意味のない金を使わされているのは、
見ているだけで苦々しい。

その後、バレンタインデーの成功に図に乗っ
たデパートが、ホワイトデーなるものを宣伝し
出したのには、呆れたのを通り越して腹が立っ
た。一ヶ月後の三月の十四日にバレンタインデ
ーに貰ったチョコレートのお返しをしろという
のである。

馬鹿言っちゃいけない。急にそんな日を持ち



出して散財しろと言われたって、はいそうですかと財布の口を開けるほど、こちらら、お目出度くねえや……と思ったのは、私だけではないとみえ、ホワイターはまだ仕掛けた側の思惑ほどには流行ってないらしい。

祝着至極と思っていたら、安心は禁物だった。

近年、十月三十一日にハロウィン祭のアメリカの風習をまねて、馬鹿騒ぎする若者が増え始めたという。

バレンタインデーと同じく、万聖節やハロウィンの由来も知らずに、映画や雑誌から嚙り取った単なる物真似なのだろうが、お前らとキリスト教の聖人達と、どういう関係があるのかと訊いてやりたくなってくる。

夜間、変なお面をかぶった連中が入ってきたら、銃がないから撃ちはしないが、びっくりし

て一一〇番ぐらいはするだろう。

ある風習の背後に連綿と続いてきた文化も知らずに、習わしの表面だけを輸入するのは、いい加減にしておいたほうがいい。そして古来からあるこの国の風習を見直すべきだ。

東京で、下町の祭りや市を別にして、今残っている家庭での行事は、正月、節分、七夕ぐらいのものだろう。

このうち、節分と七夕はもう大分影が薄く、そのうちなくなってしまう恐れもある。

単なる懐古趣味で言っているのではない。このまま行くと、来世紀の半ばにもならないうちに、東京は文化的に無国籍のごった煮のような都市となり、美しい日本の四季の風物詩は、よほど田舎へでも出掛けないとみづからなくなってしまうのではないかと恐れるのだ。

利根川裕のマイアングル

〈最終回〉

読書巡礼

利根川 裕

つい先ごろである。

ある月刊雑誌の編集部からの電話で、「小誌では毎号、〃無人島へ持っていく本〃というエッセイの連載企画をやっています、来月号には、ぜひご執筆を」とのこと。

向こうの依頼趣旨を聞いているうち、ふたつ返事で、これを引き受けた。そのときとつさに『歳時記』が頭をよぎった

からである。

わたしは俳句よみではない。ほんの戯れごとで十七文字を並べてみることはないでもないが、それは座興。まあ、カラオケで一曲歌ってみる程度の話である。だから、俳句をよむ人たちのように『歳時記』をひらくわけではない。

また、『歳時記』は、小説や評論のように、第一ページから読みすすむ、とい

うものではないから、愛読書というのとは、少しわけが違ふ。

にもかかわらず、わたしはこれをすぐ手の届くところに置いて、折にふれ開いてみる。しかも、かなり頻繁に。

たとえば。数日前、地方にいる友人からの報せで、螢のころとなったから一度遊びに来ないか、との誘いがあつた。

こうなると、ついわたしは手持ちの『歳時記』を取り出してみるのである。螢というページを繰ると、こう記してある。

——水辺に光りながら飛び交つて、夏の夜の美観をなす。腹端に複雑な発光器があつて、熱を伴わない冷たい光である。いろいろの伝説を生んでいるが、源三位頼政の怨霊とも言ひ、その忌日の陰暦五

月二十六日には、宇治に集まつて戦いを挑み螢合戦を行なうなどと言ひ伝えてゐる。実は多くの螢が一团となつて生殖行為をなす場面にすぎない(以下略)——

こういう解説を読むのが、大好きなのである。『広辞苑』で螢の項を引いてみても、こんな人間的叙述は出てこない。そこがいい。たいへん人間的な知識の情報を仕込むことが出来るだけではなく、こういう解説によつて、いろんな空想が刺激される。

そして、いくつかの例句が掲げられてゐる。

草の葉を落ちるより飛ぶ螢かな 芭蕉
この闇のあな柔かに螢かな 虚子
螢くさき人の手をかぐ夕明り 犀星

螢火や疾風のごとき母の脈

波郷

隠亡の家路を照らす螢かな

麦南

ここにあるのは、わたしの持ち合わさない風情であり、わたしの思いもよらない情景である。そして、わたしはここから、ひとりよがりながらも、いくつかの物語を編んでみることになる。

『歳時記』には、こんな楽しみが、いっぱいつまっている。だから、無人島に持っていくとなると、これに限る。

というわけだったのだが、じつは『歳時記』について書くということにはならなかった。

念のため、ということと、編集部から送られてきたここ数カ月の連載記事のコピーをみたら、なんと、すでに三号前、『歳時

記』を取りあげた筆者がいたのである。

やられた、と切齒扼腕。につきき筆者もいたものである。

こうなると、あわてて選び直さなくてはならない。

そこで、書庫へというほどのものではないが、とにかく雑然と本を置いてあるへ室へ入って、自分の人生に深い関わりを持った本を取り出すこととなった。

かつてのわたしに深い痕跡を刻みこんだものの、いまは素通り出来る本もある。あるいは、かつての自分の自画像を見る思いで、ふりかえってみたくない本もある。がその中で、どうしても気がかりになって、向こうから呼びとめてしまう、とてもいった本もあった。

わたしは、そういう二冊の本を取り出して書斎の机の上に置いた。一冊は、和辻哲郎『古寺巡礼』。もう一冊は、亀井勝一郎『大和古寺風物誌』。

わたしは、大学卒業とともに亀井勝一郎先生に師事した人間である。このことは折にふれ幾度も書いてきたことであるが、とにかく「弟子にして下さい」と志願した人間である。だから、この方は、なにがなんでも先生である。

ところで、和辻哲郎先生はわたしの大学の主任教授である。しかも、たまたま主任教授だった、というのではない。わたしは、和辻哲郎という方がいらつしやるからこそ、文学部を志望し、哲学科（倫理学科）を選んだ学生であつた。つまり

志願したのである。だから、この方も、なにがなんでも先生である。

日本では珍らしいほど体系的哲学者であつた和辻先生にとって、『古寺巡礼』は学問的主著ではない。また文芸評論家として多彩な活躍した亀井先生にとって、『大和古寺風物誌』だけが代表的著作ではない。

またわたしは、『古寺巡礼』一冊だけで和辻教室に加えてもらったわけではないし、『大和古寺風物誌』一冊だけで、亀井門下の一人としてもらったわけではない。

が、この両先生の大和古寺への接近、傾倒のしかたは、決定的に違っている。たとえば『古寺巡礼』の著者は、薬師

寺の塔について、

「わたくしたちは金堂と東院堂との間の草原に立って、双眼鏡でこの塔の相輪を見上げた」

と書きだす。

が『大和古寺風物誌』の著者は、

「まず薬師寺の東塔がみえはじめる。松林の、緑のあいだにそそり立つその端麗な姿が、次第に近づいてくる有様はじつにすばらしく、古都へ来た悦びが深まるのであった」

と記す。

「双眼鏡で見上げよう」とする人と、「古都へ来た悦び」に感動している人。『古寺巡礼』の初版は大正八年。そして『大和古寺風物誌』の初版は昭和十八年。ほ

ぼ二十五年の歴史的時間がある。そこで亀井勝一郎はいう。

「明治以前まで、古寺古仏とは、つねに礼拝の対象であった。古仏は彫刻ではなく、ひとえに礼拝の対象であり、これを語ることは信仰を語ることであった。……

古寺古仏が純然たる美術品として、美的鑑賞の対象として、当然のごとく扱われはじめたのは『古寺巡礼』あたりからであらう。ここに重大な転機がひそむ」

『古寺巡礼』は、古代ギリシア以来の美術との比較で古寺古仏の魅力を説きあかそうとしている。それにくらべ『大和古寺風物誌』は、古寺古仏は見るものではなく、祈るためのものだったと主張し、著者自身、祈るためにここを訪ねている

のである。

亀井先生は、和辻先生を大正教養派と断じている。そういう言いかたを模すれば、亀井先生は、昭和初期のマルキシズム転向の求道派であつた。大正教養派と昭和求道派。これはともに、その時代を代表する誠実な時代証言であつた。それならば、このお二人を先生とするわたしは、いったい何であり、何を証言すればよいのか。

わたしと同年代の梅原猛氏に、この問題をめぐつての魅力的にして刺激的な、いくつもの労作がある。もちろん、和辻・亀井の先人の成果を踏まえての論考である。

ところで、わたし自身のわが身のこと

である。たいへん恥ずかしいことであるが、二人の先生に師事したはずのわたしには、明快な立場がない。いうならば、少なからず逃げているのである。

逃げながらも、わたしから離れないテーマでもある。

ところで、かくも気がかりな二冊は、無人島へ持っていく本というわけにはいかない。

では、けっきょく、わたしは何を選んだのか。ホメロスの『イリアス』である。いうまでもなく世界最大の叙事詩。古典中の古典である。亀井先生のいう「美(術)と信(仰)のあわい」というテーマの原初的な姿が、ここにあるからである。

(作家)

現代の快僧その七

真言宗

摩尼山徳恩寺住職

鹿野融照さん

山谷、寿町に 飛び込め

取材・文 稲葉小太郎

夏も盛りの八月十五日、横浜市中区寿町の一
角に「地藏本願経」が響く。まだ新しい御影石
のお地藏さんの前にはずんぐりした体型のお坊
さんが座り、額に汗を浮かべながら一心にお勤



かのう・ゆうしょう●1938年神奈川県生まれ。東洋大学文学部
仏教学科卒。「仏教タイムズ」、中学校教諭をへて、徳恩寺住職に。

めをしている。その後ろには、線香を手にした
日雇い労働者が列をなし、順番にお線香を捧げ
ていく。

あたりにはえもいわれぬカレーの匂いが漂う。

にわか作りのテントの前にはすでに三百人ほどの列だ。

一時間のお勤めのあと、カレーライスの無料給仕が始まる。五十人のボランティアが午前中いっぱいかかって仕込んだ、肉と野菜がたっぷりのカレーライス千人分が、ものの四十分ほどで消えた。

「坊さん、うまかったぜ」

「来年も頼むな」

乱暴だが、心からの感謝の言葉が掛かる。鹿野融照さんの丸い顔に、まさに満面の笑みが浮かぶときだ。

「オレたち、死んでも仏になれねえ」

神奈川県横浜市にある摩尼山徳恩寺（高野山真言宗）住職の鹿野融照さんと寿町の係わりは、

もう二十年になる。

寿町では毎年何人もの生き倒れの死者が出る。

家族からも見放された彼らは、死ねば無縁墓地に打ち捨てられるしかない。公営の久保山霊園の納骨室を覗くと、累々と重ねられた遺骨がなんとも痛ましい。

「私に、なにかできることはないだろうか」

鹿野さんが尋ねると、寿町の自治会長は、

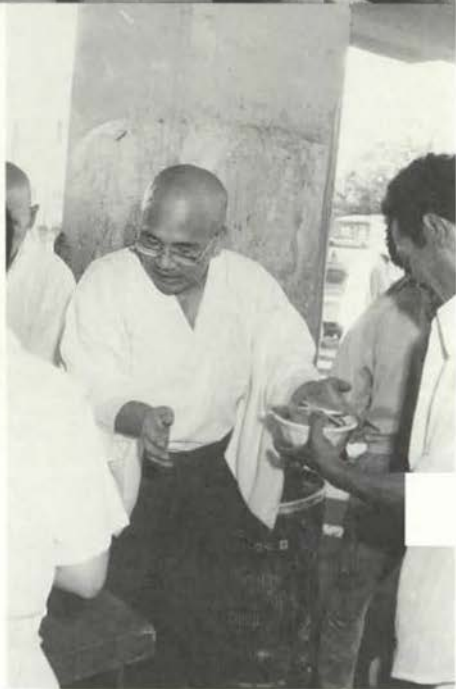
「ほとけ様を立ててください」

と答えた。腕つぶしだけが命の暴れん坊に見えても、彼らだつてなにかに手を合わせたいのだ。ただ、手を合わせる対象がないだけなのだ。そう気づいた日から、鹿野さんの奔走が始まった。毎週日曜日には、四歳になって得度したばかりの長男の融完君を連れて、寿町内を托鉢して回った。当時テレビアニメの「一休さん」が人気



横浜の寿町での無料給仕。鹿野住職自らも奉仕にいそしむ。

になっていたところで、人々の反応は好意的だった。貧しさでは比類なき寿町だけに、お布施の額はひとり十円玉一枚、百円玉一枚がせいぜいだったにもかかわらず、塵も積もれば山、四年間で三十八万円が集まった。それをすべて提出して、昭和五十三年、高さ約一、二メートルのお地藏さんを徹夜の突貫工事で完成した。



それ以来、お彼岸とお盆には法要を行なっている。八月には千人分のカレーライスを、十二月には年越し蕎麦として千人分の天麩羅うどんを労働者たちにふるまう。

八月のカレーライスにかかる費用が約八十万円。これはお盆の全檀家のお布施をまるまるこれに当てている。お盆の三日間はお坊さんにとっても一年で一番忙しい時期だが、鹿野さんの場合は十五日の午前中までに終わらせなければいけないから、さらに大変だ。お経は一軒につき二分、履物を脱ぐ時間も惜しいので、窓の外から失礼する。

檀家のひとたちから、苦情は出ないのだろうか。

「それは全然ありません。だって檀家のひとたちがお布施してくれたお金が、千人分のカレー

ライスに化けるんですから。いわば檀家さんたちが施餓鬼のスポンサー。そのことが一番大事なウランバナなんだと、日頃からいっていますから」

答える表情にはくっつくがない。自分の行動に、自信を持っているひとの顔である。

法要だけではない。故郷も遺族の存在もわからない、わかつて引き取りを拒否される亡骸は鹿野さんが手厚く葬り、遺骨は徳恩寺で預かる。これもまったくのボランティアである。

こんな具合だから、徳恩寺には次から次へと遺骨がたまってしまふ。そこで寺の裏山を開発して「青葉霊園」を作った機会に、霊園の一角に「千秋の丘」の石碑を立て、寿・山谷の無縁仏を散骨するための場所とした。

その年の十月、仲間を弔うために山谷と寿か

ら労働者たちが集まった。墓に線香を上げたあととは弁当を食べ、五時までカラオケ大会。ふだんはおちおち寝ていることもできないのか、本堂でたっぷりと昼寝をしていく者もいた。

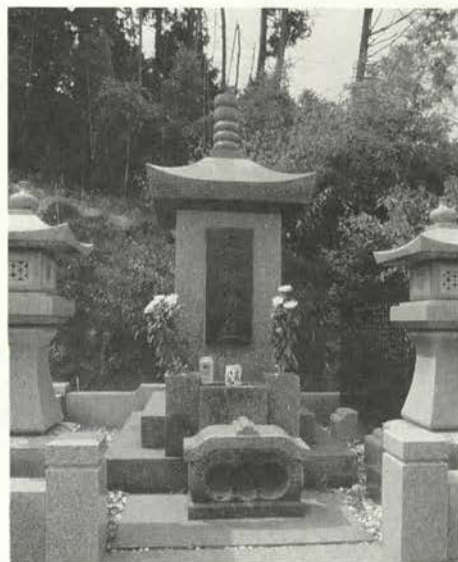
「彼らに仏心がないなんて思っちゃいけません。あのひとたちのなかに、どれほどやるせない思いで仏の慈悲を祈っているのか。また、そういうひとたちを受け入れるのが仏さんなんです」
そう話す鹿野さんの顔はくしゃくしゃである。眼鏡の奥の目は、笑っているようにも、泣いているようにも見えた。

絶望が私を強くした

寿や山谷の簡易宿泊所街は、ふつうなら足を踏み入れるのさえたためらってしまう、独特の雰囲気漂っている。それは社会の最底辺という

よりも、社会からその存在を否定されてしまっている場所。その場所へ飛び込んでいき、労働者たちとつながりを持ち、さらには彼らを自分の寺に受け入れてしまう。並大抵の覚悟ではできないことだ。いったいどのような思いが鹿野さんを駆り立てているのだろうか。

鹿野さんは昭和十三年五月五日神奈川県横浜



徳恩寺の青葉霊園にある山谷の人たちのお墓「千秋の丘」。

市金沢区の薬王寺という小さな寺に生まれた。

男兄弟六人の次男坊。中学一年生のとき父親が胃潰瘍で倒れ、ほとんど寝たきりになってしまった。学校から帰ると握り飯を頬張り、自転車に乗って月参りに出掛けた。一年三百六十五日、ほとんどがそれだった。

一家の生活は、中学生の鹿野さんの肩にかかっていた。一方で成績優秀だった長男は、寺の仕事は免除されていた。

兄に対するコンプレックスと寺を支えている者の自負の板挟みになりつつも、鹿野さんは黙々と毎日をこなしていた。

そんなある日、仏教のことで兄と大論争になった。鹿野さんが高校一年、兄が高校三年生のときだった。

兄はいう。

「僧たるもの、悟りを開かなければ、ひとを救うことはできない」

弟はいう。

「では一生悟れない者は、ひとを救うことはできないのか。悟りよりも、救済こそが命じゃないのか」

自分は初めて兄の理論を越えたと思った。そのとき父親は自分に味方してくれるものだとばかり思っていた。ところが父が発した一言は、

「それぞれが自分の思う道を歩め」

鹿野さんは絶望のどん底にたたき落とされた。その直後に観た映画がジェームス・ディーン主演の「理由なき反抗」。小銭を貯めては観にいき、ひとり映画館の中で泣いた。ルナールの『にんじん』、太宰治の『人間失格』は何百回も読んだ。「おれみたいなやつがいるんだなあ」

そう思うと、あのときの絶望が、逆に自分を強くしてくれているのに気がついた。

高校卒業後、推薦で東洋大学文学部仏教学科へ。卒業して一時「仏教タイムズ」で働いたが退職し、中学校の教師となる。

昭和三十九年、東京オリンピックの真っ最中に、紹介してくれるひとがあつて、ここ徳恩寺に住職として赴任してきた。

『風土記』などの記録によれば、徳恩寺は千年の歴史がある由緒正しい寺らしい。ところが山門をくぐってみると、草はぼうぼう。本堂はぼうぼう。料金が払えないので電気は止められる、電話も止められるという状態。

それでも四年間は中学校の教師と二足の草鞋でなんとかやってきたが、有給休暇だけでは法事がこなせなくなったのを機に、寺に専念する

ことになった。

「とにかくこの寺を、理想の寺にしよう。食えなくてもいい。飢え死にしたっていい。お大師さまに命令されてきたんだから、お大師さまにおまかせしよう」

そう覚悟を決めて、今日まで邁進してきたのだという。

サンの巨大なるエネルギー

鹿野さんの一日は、朝の勤行のあとの新聞の切り抜きで始まる。「朝日」「毎日」「読売」「神奈川」の各新聞に、「仏教タイムズ」「中外日報」、切り抜きテーマはエコロジー、癌、エイズ、靈感商法、雲仙普賢岳、人口、出産、平和、戦争、家族、脳死、ワイランソロビー、老人問題……。目についた記事はどんどん切り抜



あき缶収集のための軽トラック「カンカン坊主」のとなりで環境問題を語る鹿野住職。

いて、スクラップ・ブックに貼りつけていく。いじらしいほどの熱心さ。それにしても、あまりに幅が広い。

「だって、面白いじゃないですか。それにお坊さんというものは、檀家さんたちの日常の現実であるこういう問題について、常にきちんとした認識がないといけないでしょう」

もちろん、ただ出来事を知るだけではない。

鹿野さんの場合は問題の本質を捉え、自らが係わっていくという実践が常に伴っている。その実践行が今回の重要なテーマなのだが、鹿野さんの活動を並べていくだけでも紙面がつきてしまいそうなので、いくつかの活動についてかいつまんで書いてみたい。

まずは空き缶回収運動。中古の軽トラックを購入、「カンカン坊主」と名付けて、空き缶回

収のための「仏具」とした。

寺の裏には空き缶プレス機を設置、家族で空き缶をつぶす。あるときはガラス瓶で手を十四針も縫う大怪我をしたこともあった。あるときは缶の底に残った飲料を狙ってハエが大量発生して往生したこともある。見かねて今では皆がつぶした缶を持ってきてくれるようになった。

まさに、お寺が情報の発信元になって、大衆が学んだといっているだろう。

「お坊さんというのは、社会的に尊敬されている存在なんです。お坊さんが何かを始めれば、その地域全体が動きます。それはすごいエネルギーを発揮します。それがサンガというものじゃないでしょうか」

環境問題関係としては、塔婆の問題も大きい。

日本では今、一年間で八十万本の塔婆が立てら

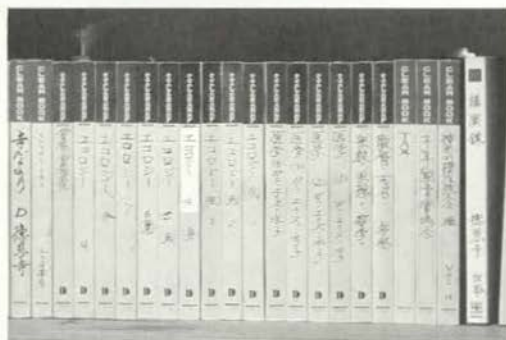
れている。ゴルフ場二十個分の緑を消費している計算だ。そこで鹿野さんは法事の際の塔婆を一族につき三本に制限。年間五千本を千本以下にしようと決定。代金は、緑を必要としているところに何らかの形で還元することにした。

目をつけたのは島原の雲仙普賢岳の被災地。

現地を視察した結果、地元の小学生百人を福岡のスペースワールドに招待した。二年目はやはり小学生百人を宮崎のシーガイアへ招待。

檀家福祉のひとつとして「蓮の実会」の活動もある。これは無我夢中で貯めた五千万円をもとに、その利子で檀家さんの母子家庭の子どもに奨学金を送り、夏冬の二回旅行会に招待する。

三月の最後の日曜日には、ひとり百円の会費で合同法要を行ない、「お父さん 安心してください」と書いた位牌に礼拝する。



気になるテーマのファイリングが並ぶ。

障害者福祉とし

て、四つの障害者

団体に所属する障

害者たちにお墓の

掃除に来てもらい、

一時間六百元のお

礼をする。障害者

が作った作品を一

個三百円で買い取

り、檀信徒さんへ

のおみやげにする。

老人福祉としては「ひかり苑」「みどりの郷」

などの老人ホームでの法要。

中国人留学生のための援助コンサートもある

し、インドシナ難民センターのためには募金を

集めて、年末に七千食のインスタントラーメン

を届けている。

曼陀羅思想に基づく「方便行」

ボランティア活動と聞くと、ぼくたちの反応としては、素晴らしいなあと思う反面、どこかでこそばゆさのようなものを感じてしまう。ひとのために何かをするという発想が慣れないのだ（もちろんボランティアの本質はそういうことではないのだが）。しかし、鹿野さんの活動は、そういうつまらない思惑が吹っ飛んでしまうような、圧倒的な分量と内容である。自分でないがなんだかわからなくなってしまうことはないのだろうか。

「私の胸には引き出しがたくさんついています。気がついたときに引き出しに入れておき、あとで自由に取り出して眺めてみる。いいアイディ

アが浮かべば行動に移すし、浮かばなければまたしまつて温めておくんです」

鹿野さんの胸のなかには曼陀羅があるのだろうか。曼陀羅とは、真言宗の教えのなかでもっとも重要な概念で、宇宙のなりたちをシンボライズして描いた図像である。

曼陀羅には仏や菩薩が描かれているが、殺人者や売春婦だつて際限なく豊かな仏の世界の住人。そのすべてが仏によつて受け入れられているというのが曼陀羅の思想だ。

鹿野さんは自分の社会活動を、そうした曼陀羅思想に基づいた「方便行」だという。直接的に仏の教えを説くことではないけれど、方便をもつて究境となす、との言葉どおり、なにをやつてもそれは、仏様のこころにかなうことなのだ。

もうひとつ曼陀羅の醍醐味とは、仏と人間の、交流のダイナミズムを生み出すということだ。

ぼくたちの現実の世界が実は大いなる大日如来の世界と同じなんだと気づかせてくれる。その意味でも、鹿野さんの活動は、曼陀羅と呼ぶしかないもののなのだ。

ただこうした活動が、宗門全体にまで広がらないのも現実だ。一緒にやろうというお坊さんはいないのだろうか。

「今のところ、いませんね。さびしい？ そんなことは全然ありません。大衆がついてきてくれるから」

地域のお寺が核になって、ネットワークの輪がひろがる。そこからさらに別のプロジェクトが考え出される。その菩薩行の曼陀羅ネットワークとは、檀家そのものである。

「檀家制度こそ、信仰の基本なんです。檀家制度をいかに生かしていくかに、日本仏教の再生がかかっているんです」

鹿野さんがからだひとつでこの山門をくぐったとき、わずか二百四十軒だった檀家さんは今では七百八十軒。それ以外に信者さんが八百軒を数える。

「お坊さんが面白くてしょうがない」というのが良くわかる。

最期に絶対に書いておきたいことがある。家族の問題である。鹿野さんは二男二女に恵まれて幸せそのものに見えるが、実は生まれたのは六人で、次男と次女のふたりを相次いで亡くしているのである。

「仏様が信じられなくなって、もう坊主を止め

ようと思いました」

ほとんど錯乱状態のなかで毎日泣きつづけていた。そのなかで観音巡礼の旅を思い立ち、関東、秩父、西国と回るうちに、京都の仏具店でそれはすばらしい観音さまを見つけた。そこで有り金はたいて手付けを払い、昭和五十六年五月、完成とともに開眼供養を行なった。毎月第三日曜日は水子供養の日とした。

水子供養にやってきた母親に、すぐに観音様を拜ませることはしない。たつぷりと説教をする。相手が涙を流すまでやる。それは、もうこんなことは繰り返してくれるなよ、という鹿野さんの願いのあらわれなのだ。

そこで集まった布施は一円残らず、すべて障害者団体に寄付している。ここでも見事な曼陀羅のダイナミズムが展開されているのである。



念仏信仰の系譜

中国編

須藤隆仙

2

慧遠法師の影響

五世紀初頭、中国の廬山^{ろさん}で、慧遠法師^{えげん}によって行なわれた大念仏信仰運動は、中国仏教史の

中でも特筆されるべき事件でありました。そのための信仰結社「白蓮社^{びやくれんじや}」は、後人の大きな信仰模範ともなりました。浄土宗二祖聖光上人^{しょうこうじやうじん}の弟子宗円上人^{しゆゑんじん}が渡宋して廬山を訪拝し、感激し

て自らの法名に白蓮社の号を頂いたことは前回
記しましたが、以来今日でも浄土宗の坊さんは
法名に蓮社号を頂いているわけでありす。

大学者望月信亨博士のご教示によりますと、

慧遠法師の寂後、弟子の方たちが諸地方に布教
し、中国の南方地域に念仏信仰が広く弘まった
のでありました(『中国浄土教理史』)。その後さ
まざまな消長があつて白蓮社の直系は見られな
くなりますが、その間、浄土念仏の法門を「蓮
宗」と呼ぶようになっていたのです。諸橋『大
漢和辞典』にも「蓮宗」として「浄土宗の異称」
と出ております。蓮宗の名はもちろん慧遠法師
の白蓮社の故事に因るものでした。これは日本
にも受け継がれ、日本でも浄土宗のことを蓮宗
とか蓮門とか呼んだのです。ですから、法然上
人の教えは善導大師の系統というものの、今
日の浄土宗には、なお慧遠法師の影響が消えな

いでいる現実を知っておく必要があるわけであ
ります。

仏教全体に念仏あり

前に記した凝然大徳の『浄土法門源流章』に、
「震旦浄教伝通次第」として、中国で念仏信仰
をもち、これを弘められたお方の名を連ねてお
ります。震旦は、古代インド人が中国をチーナ
スターナと呼んだものの音写です。振丹・真旦な
どとも書きます。それには、道安・廬山慧遠・
菩提流支・曇鸞・道綽・善導・懷感・少康とい
った方々の他に、浄影寺慧遠(先の慧遠とは別
人)・智顗・吉藏・慧浄・法常・道闇・龍興・
迦才・窺基・知礼・智円・遵式・元照・宗曉な
ど多くの高僧の名を記しております。そして震
旦(中国)とはいふものの、法位・元曉・玄一・
義寂・円測・慈藏・憬興といった朝鮮新羅の方

も記しているのです。

このうち曇鸞・道綽・善導・懷感・少康の五師は、法然上人が中国における浄土教代々の五人の祖として、浄土五祖に選定しておられます（『選択集』）。このお方たちは、お念仏を専らにされた方々ですが、他はご自分のメーンになる信仰の傍ら念仏を行ぜられた方、または念仏の他にも何か行ぜられた方々でした。ですから凝然大徳は「その数極めて多し。みな浄教（念仏の教え）を解し、宗旨を發揮し、各本宗を弘め兼ねて浄教に通ず」と記しておられるのであります。たしかにそのとおりでありまして、例えば、浄影寺慧遠師は地論宗という宗派（今はない）の学僧でしたし、智顗師は中国天台宗の開祖であり、吉蔵師は三論宗の学僧でした。

この他に、南宋時代に書かれた『仏祖統紀』という書があつて、中国仏教史の大切な文献で

ありますが、これには禅僧なども念仏信仰者として出てくるのであります。実際に中国では、唐代から禅と念仏を併修することが行なわれ、のちにこれは中国仏教史の中の大きな流れともなるのであります。例えば、江戸前期に隠元（いんげん）禅師によつて日本に伝えられた黄檗宗（うわくぶく）（宇治万福寺が本山）などは、禅と念仏とを行ずるのであります。

こういったことは、ピューリタニズムな視点から見ると、完全に整った信仰ではないように思われるかもしれませんが、事実、日本でも、鎌倉末期に『元亨釈書』を書いて有名な虎関師錬（こくかんしれん）という臨済宗の坊さんは、浄土宗のことを「寓（う）宗」と評したのでした。寓宗とは「他の宗派に寄寓（きよ）している」という意味でありまして、一宗として独立したものではないという評であります。念仏というものは、独立したものではなく、

他の教えに付随して行なわれていると、こういう言い分であります。

しかしこれは、ものの見方の問題でありまして、私はむしろ、このところにこそ、念仏が真に仏教の本流たる所以があると思つてゐるのであります。本流でありますから、他のどの流れも、これと無縁になることはできないのであります。逆にいうと、どの流れも本流を頂いてきてのものである。見方によつては本流というものとは、どの流れにも流れ込んでいる寄寓的存在なのであります。

「南無阿彌陀仏」のお念仏も、私はまったくそのとおりだと思つてゐるのであります。仏教のどの教えの中にもお念仏がある（だんだんにもつと詳述しますが）、お念仏こそ仏教の本流なのであります。それは「インド編」で詳述したとおり、すでに釈尊のご生涯の根底にお念仏があ

るわけであります。

この『浄土』誌を育ててくださったお一人に、故竹中信常博士（大正大学教授）がおられます。この竹中先生が素晴らしいことをおっしゃつておられるのであります。それは「お念仏は蒸留水である」というのであります。蒸留水というものは無色無味、色もなければ味もなく、見方によつてはあまり妙味のある存在ではありません。ところが、これがどうしてどうして、ビールでもジュースでも蒸留水がないと出来ないものであります。あらゆるおいしい飲み物に蒸留水が必要です。あらゆるおいしい飲み物に蒸留水が必要であります。蒸留水がなければ、いい飲み物は出来ません。ですからいい飲み物には、みな蒸留水が入つてゐる。お念仏もこれと同じで、仏教の蒸留水でありますから、どの教えの中にも、みなこれが入つてゐるのであります。これがないと仏教にならないのであります。竹

中先生は譬喩の大家であられましたが、ほんとうにすばらしいことをおっしゃられたと感服している次第であります。

江戸前期に懷音かいおんという浄土宗の坊さんが『諸家念佛集』という九巻の、これもすばらしい本を書いておられます。諸家というのはへん教各宗しやうということ、各宗にもみなそれぞれに念仏ねんぶつがあるということを、実例や文献を挙げて記述した大著であります。これには、律宗・法相宗・三論宗・禪宗・華嚴宗・真言宗・天台宗などにみな念佛ありとして、それぞれに経論の証拠をあげ、それを信仰実践した高僧の事跡を集録してあるのであります。懷音師はほんとうにすばらしいことをしてくだされたのですが、このようなご努力の作業が可能なのも、実にあって仏教全体の中にお念仏ねんぶつがあるからなのです。

例えば、真言宗などは秘密宗といわれ、即身成仏（現在の肉身のままで仏に成る）ということとを宗旨としているのですから、阿弥陀仏の西方極楽浄土へ往生を願うといった念佛信仰とはまったく異質のもののように思われがちですが、どうしてどうして、そうではないのであります。ここに最もわかりやすい事例を挙げさせてもらいますと、昭和二十五年に出された石井教道先生還暦記念『仏教論攷』に、真言の大学者神林隆浄先生しやうが「密教の浄土往生思想」という貴重な論文を書いておられるのですが、何とその論文は「往生極楽の思想は大乗仏教の通念である」という書き出しで始まるのであります。愚人私わがが、今ここに「お念仏こそ仏教の本流である」ということを述べさせていただいておる、そのことがこういう大学者（それも真言宗の）によって既に明言されているのであります。何とい

う尊いことでありましょうか。さらに神林先生

は、「真言宗に於ては、弘法大師は兜率入定（たうすつにやみじやうぢやう）（弥

勒菩薩の世界に入ること）を期しておられたが、

その末流を汲む大多數の先徳学匠は、やはり安

養浄土（あんやうじやうど）（極楽世界）を望むものが多数を占めて

いる」と続けられて筆を進めていかれるのであ

ります（カッコ内は私の註）。このように真言宗

にもお念仏信仰がちゃんとあるのでありまして、

とくに覺鑊上人（かくがくじやうじん）という大変面倒な字を書く上人

様、平安後期のお方ですが、この方などは真言

宗の教えに大々的に浄土往生の教えを加えられ

て一派をなされたのでありまして、これがいわ

ゆる新義真言宗といわれるものであり、和歌山

県の根来寺が有名であります。神林先生はこの

上人の教えを詳細に記述され、真言宗の往生思

想を紹介しておられるのであります。日本の話

が混ってしまいました、とにかく右のような

わけであります。

経卷相承と知識相承

ただし、右のような事例は、今日いう浄土宗の念仏信仰とまったく同一というものでももちろんありません。それは先述のように、ご自身のメーンの信仰の傍ら念仏を行ぜられ、または念仏と他の信仰とを並べ修しておられる（双修（じやうしゆ））からであります。これに対して、浄土宗というのは、他をさしおえて先ず念仏を称える（念仏為先（めんぶつがひさき））という教えなのであり、念仏一本槍（専修）の教えなのであります。

法然上人が中国の浄土五祖を指定された、これは即ち、専修念仏の方々なのであります。ところで、浄土宗の「おつとめ」には、浄土三国伝灯列祖として、馬鳴菩薩・龍樹菩薩・天親菩薩・菩提流支三蔵・曇鸞大師・道綽禪師・善導

大師・法然上人(以下、二祖・三祖……と続く)というふうにご回向をするのであります。三國はインド・中国・日本で、伝灯列祖は、念仏の灯火を消さずに伝えてこられた代々の祖師様ですが、天親菩薩(世親菩薩のこと)までがインド、善導大師までが中国です。

馬鳴菩薩は一世紀から二世紀にかけた頃インドに出現されたお方で(梵名アシバゴーシヤ)、『大乘起信論』という書物を著しておられ、この中に阿弥陀仏を専念することが説かれており、それで浄土教の祖師の一人に数えられているのであります。ただし学問的には同書は馬鳴菩薩の著ではないとの説もあります。それはともかく、浄土宗の宗義では、このような書物を主にした念仏信仰の伝統のことを経卷相承(そうじようそう)といいます。これに対して、師から弟子へといったような信仰の伝承を知識相承(ちしきそう)といっております。

知識とは善知識のことで、即ち立派な先生のこととあります。浄土宗では経卷相承といった場合は、馬鳴・龍樹・世親・菩提流支・曇鸞・道綽・善導・法然の八祖を指し、知識相承といった場合は、世親・菩提流支・曇鸞・道綽・善導・法然の六祖をいうのです。

さて、ここでお気づきになったと思いますが、経卷相承にしても知識相承にしても、中国の部では菩提流支・曇鸞・道綽・善導の四祖なわけであります。そこでまず、この四祖について述べてみます。

菩提流支三蔵の業績

まず三蔵というのは、蔵は梵語ピタカで容器のことであり、仏教文献を三容器、つまり三部門に分けた言い方なのです。三部門とは、釈尊の説かれた『経』と、戒律を示した『律』と、

高僧などによる論文（經の註釈書）である『論』とをいい、これを經律論とか三藏とかいうのです。そしてこの三藏に精通している僧を三藏法師と尊称し、略して単に三藏とも称するのです。つまり三藏は經律論にもいい、僧にもいうわけです。僧の三藏でよく知られているのは『西遊記』の玄奘三藏であります。三藏と称される方は幾人もいるわけですが、ここにいう菩提流支三藏は北インドの人です。梵名をボーディルチといい、菩提留支とも書きますが、北魏永平元年（五〇八）、中国の洛陽に来て武帝の厚遇をうけ、たくさんさんの經論を漢訳してくれたのでした。浄土教関係では、世親菩薩の『無量寿經優婆提舍願生偈（略称は往生論とも浄土論とも）』を訳してくだされたのですから、大変にありがたい存在なのであります。

それだけではありません。次回に述べる曇鸞

大師に、觀無量寿經を授けたとされているのであります。このときの經が果たして觀無量寿經であつたか、あるいは別の經論であつたかについては異説もありますが、とにかく曇鸞大師に浄土の教えを紹介した師とされているのであり、法然上人も『浄土五祖伝』にそのことを記され、親鸞聖人も『高僧和讃』に、「菩提流支の教えにて、仙經ながくやきすてて、浄土に深く歸せしめき」と述べておられるのであります。

ただし学者の説には、菩提流支三藏は浄土教信者でなかったとするものもあります。しかしその門弟に阿弥陀浄土の信奉者がいますから、この学説は如何かと思われ、とくに多くの經論を訳された流支三藏が、浄土經論の特色をよく知っていたことは、充分考えられ得ることですから、それを曇鸞師に紹介したとしても、何ら不思議はないのであります。（函館・稱名寺住職）

終戦近き日に



紀野一義
イラストレーション—小菅遼

終

戦の時、私は二十二歳、関東軍の工兵の隊長として台湾の宜蘭イランという町の郊外に部下を率いて駐屯していました。陸軍と海軍の特攻基地があった町です。

夕方になると特攻機が三機編隊で真紅の夕焼け空に舞い上がりました。それは絵のように美しい光景でしたが、特攻機は往きのガソリンしか積んでいませんし、機銃も取り外し、機首に黄色火薬を満載した自殺機です。決して生き還ることはないんです。

なんであんなに美しい夕焼け空の中を死にに行かなくてはならなかったんですかね。お国のためでしょうかね。でも、ほとんど効果はなかったんですよ。対空砲火でほとんど撃墜されてしまいましたからね。

夕焼け空を見ると私はすぐにお浄土を思い出

すんですが、そんな中をたった三機で死に行く勇士たちは神さまのようでした。私は何十年たっても、あの人たちのことが忘れられないんですよ。

私と特攻隊の将校たちとのつきあいは、ある中尉さんを逮捕したことから始まりました。

私は兵団の展開している全域に落ちたアメリカの不発弾を片っ端から処理して、終戦までに実に千七百五十発もの大小の爆弾を処理して歩いていたのですが、そのきつかけは、特攻隊の操縦士の宿舍の天井を突き破ってそこで止まり、揺れて今にも落ちそうな二百五十キロ爆弾を、憲兵隊長堤大尉に依頼されて処理したことからでした。

その憲兵隊長堤大尉からある夜、電話がかかって来ました。特攻隊の将校がシナ人の酒場で

酔つ払つて日本刀を振り回して暴れているから、逮捕してくれという電話でした。

「そりや憲兵隊の仕事でしょうが。そんなこと、できませんよ」

「そういうな、俺たちが出て行つたらどういうことになると思うんだ？」

「そりや、軍法会議でしょうな」

「そうだろう。特攻隊の将校をそんな目に合^あわすことはできないのだ」

「それで私に行けというわけですか？」

「その通りだ。頼む、取り押えて来てくれ」

「堤大尉」「何だ」

「この件に関しては全部自分に任せてくれま^すね？」

「うん、全部任す」

「手に余つたら射殺しますが、よろしいです

ね？」

「なに、射殺？」

大尉は沈黙した。たまげたんでしょう。まさかと思つたんでしょう。その「まさか」ですよ。私は本気です。それ位の気持でなきや真剣を振り回して暴れている男を捕えることはできませんよ。

「そうです。手に余つたら、しょうがありません」

「よしわかつた。お前に任す。責任は俺^がが取る」

「堤大尉」「何だ」

「捕えても憲兵隊には渡しませんよ」

「そんなことあわかつとる」

「じゃ、やりましょう」

私も青年客気。やってやるぞと腹をくくつたのです。

すぐに先任下士を呼び、上等兵を二名選び出させました。先任下士を入れて三名、実弾を持たせて整列させました。

「弾丸を込め」

三人の兵の眼が吊り上がり、拳銃して遊底を開き、実弾を五発装弾しました。ガチャンという金属音が夜の闇の中に鈍く響きわたりました。

「安全装置掛けよ」

「付け剣」これで三人の眼は吊り上がって蒼白になりました。兵達はようやく、容易ならぬ事態に直面しようとしていることに気が付いたんです。実弾を装填し、着剣することは、直ちに戦闘行為に移ることを意味しているんです。

「これから、シナ人の酒場で暴れている特攻隊の将校を逮捕しに行く。手に余ったら射殺する。いいな」

その頃の私の烈しい気性をよく知っている兵達はすぐに納得しました。夜の町をその酒場で走るんです。到着すると、正面から一気に突入しました。

中尉は気を吞まれて棒立ちになりました。ギリギリ光る銃剣を三本も胸もとに突きつけられているんですからね。本物の銃剣で実戦をつくりの銃剣術をやったことのない航空隊の将校では、手も足も出なかったでしょう。私の思った通りでした。装弾してない銃剣だったら、兵の方がビビったことでしょう。

「軍刀を納めなさい」「私について来てください」

中尉を連行したのは私の隊です。中尉はすっかり気落ちして静かになりました。

「酒、少し飲みますか？」



酒

を少し飲んだ中尉は、正気に戻りました。

「中尉、もう帰れますかね？」「うん、

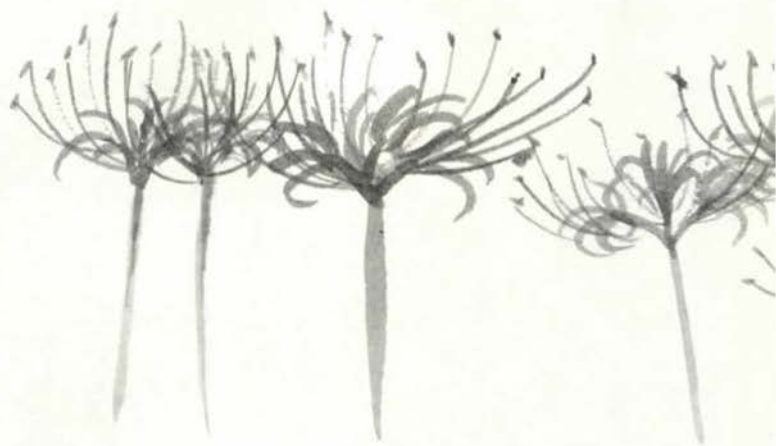
帰れる」「そうですか。じゃお帰りなさい。

中尉、憲兵隊には報告しませんからね」

中尉は出口のところまで歩き、何を思ったのか靴のかかとをカツンと鳴らして直立不動になり、私に向かってパツと敬礼しました。

「何々中尉、三日後に出撃します。その時は、あなたに挨拶して行くからな。いろいろありがとう」

三日後の夕方は、またしても真紅の夕焼け空でした。離陸した陸軍の特攻機が三機海の上に出ると、突如その中の一機が、海岸の砂丘のそばにある私の宿舎の屋根に低空銃撃の態勢で突っ込んで来たのです。凄まじい爆音に驚いて私が飛び出すと、その戦闘機は翼を烈しく揺すつ



てバンクすると旋回し、海の上に出てまた旋回し、再び低空で突入して来るんです。「あいつだ。中尉だ！」

私は海岸の砂丘に駆け上がり、日本刀を引き抜いて頭上で振り回しました。中尉の機は三度目、夕陽に映えてキラリキラリと閃めく日本刀の真上を掠めるように飛び去りました。

今度は中尉の顔も、風になびく真っ白なマフラームはつきり見えました。たしかに中尉です。三日前に私が捕えた中尉です。約束通り別れの挨拶に来てくれたんです。涙があふれ、何も見えなくなりました。私は獣のように叫んでいます。叫ばずにはいられなかったんです。中尉は、別れの挨拶を告げる人が誰もいなかったのです。父も母も姉も妹もここにはいない、美しい恋人もここにはいない。いるのは銃剣を構え

て彼を捕えた私、同じ学徒兵出身の工兵の将校、
彼を不名誉な禁錮から救い出し、別れの杯を交
わした男しかない。その男に彼は烈しい別れ
の挨拶をして沖繩の沖へと向かったんです。

彼は、海の上で彼を待っていた二機の僚機と
編隊を組んで、真っ赤な夕焼け空の中を、沖繩
に向かって飛んで行ってしまいました。

こんな死に方を、その頃の若者はしたんです。
若い神のようでした。無数の若い神々が、その
美しい命を南の海の中に沈めてしまったんです。
戦後に私は、中原中也の詩集の中でこんな詩
を見つけました。

老いたる者をして

—「空しき秋」第十二—

老いたる者をして静謐の裡にあらしめよ

そは彼らこころゆくまで悔いんためなり
吾は悔いんことを欲す

こころゆくまで悔ゆるは洵に魂を休むればな
り

ああ、はてしもなく涙かんことこそ望ましか
れ

父も母も兄弟も友も、はた見知らざる人々を
も忘れて

東明の空の如く丘々をわたりゆく夕べの風の
如く

はたなびく小旗の如く涙かんな
或はまた別れの言葉の、こたまし、雲に入り、

野末にひびき

海の上の風にまじりてとことはに過ぎゆく如
く

この詩は、中尉の特攻機を涙を流しながら見送った、あの夕方の光景そのままの世界を詩に歌った、としか思われません。

しかも、この「空しき秋」の連章の他の章を読みたいと思っても、この第十二章以外は散逸してどこにもないのです。この章だけが諸井三郎のつけた曲とともに残ったのです。

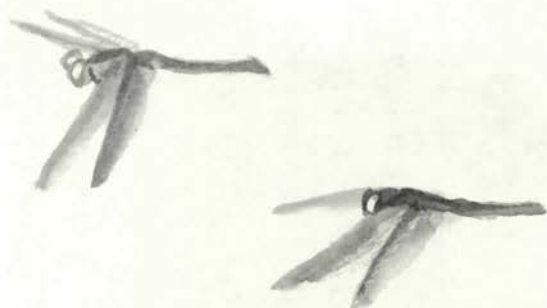
この詩の末尾に、次のような註がついています。
(空しき秋二十数篇は散逸して今はなし。その第十二のみ、諸井三郎の作曲によりて残りしものなり)

この詩と同じように、あの若い中尉の戦死三時間前のあの画のような風景を知っている者はこの私だけです。あの中尉は私のイメージ脳に空を掠めて飛ぶ隼のような姿を焼きつけて、あ

つという間にこの世から姿を消してしまいました。「燃えつきる花火のような自分の生を、君よ、忘れ給うな」と中尉から願われたような気がしてなりません。私は、夕焼け雲の美しい日はいつも中尉のことを思い出し、その冥福を祈っています。中尉を生んだご両親も、中尉の恋人も知らないあの日の夕焼け、あの夕焼け雲の中に消えていった中尉の機影を記憶しているのは、もはや私だけになりました。どうかこの記事を読まれた方は、夕焼け雲を見るたびにこの中尉のことを思い出してあげてください。

それから数カ月後、戦争は終わりました。私は終戦の翌年、昭和二十一年の二月末に、中国軍から解放され、アメリカの輸送船LSTにのせられて母国の大竹港に入港しました。

郷里の広島島の寺は廃墟になり、父も母も、姉



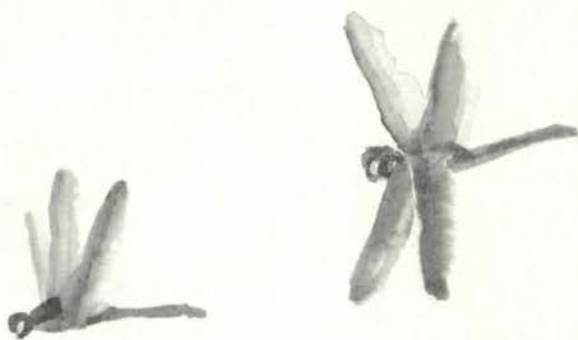
も妹も原爆死しましたので、私は天涯孤独、家なく、金なく、友なく、ないないづくしの生活が始まりました。

岡

山県の津山に居候にいったのですが、なんと心定まらないのです。日本国は終戦となっても、私の終戦はまだ来ていなかったのですね。どうしてだろうと考えつめた末、そうか、おれは「お母さん、只今！」と言っていなかったのだと気がつきました。

私は小学校以来、家に帰ると玄関の格子戸をカラカラとあけて「お母さん、只今」と挨拶したものです。すると玄関の式台のまん中に坐つて母が「おかえりない」と微笑したものでした。それで私の一日が終わったのです。

それをやってない。どうしたらいいか。そうだが、私がフィリピン戦線に赴く日の朝、母は私



の軍刀を胸に抱いて玄関まで行き、私を見送ってくれた。そして、私の手に軍刀を押しつけるようにして「それじゃ、体を、大事にしてね」と言い、ニッコリ笑った。あの顔は中宮寺の如意輪観音にそっくりだった。そうだ、中宮寺に行くしかない。

私はすぐに中宮寺に行きました。昭和二十二年の春のことです。その頃仏さまは、玄関を入ったすぐの小さな部屋に安置されていました。見習いのきれいな尼僧さんに私は、

「すみませんが、仏さまと二人だけにして頂けませんか」

とお願いしました。尼僧さんはしばらく私の顔を見つめて「よろしゅうございます」と言うなり、襖をしめて出て行きました。

私は如意輪観音の膝元の畳の上に額をすりつ

けて平伏し、絞り出すような声で「お母さん、只今」と叫びました。

涙があふれ出してとまらなくなりました。仏さまの前に三十分も坐っていました。やがて跫音が近づき「よろしうございますか」と声がかかりました。「よろしうございます。ありがとうございました」

私は尼僧さんにも畳に手について挨拶し、中宮寺に別れを告げたのです。

こうしてやっと、私にも終戦が来しました。「生きていてよかった」という実感と、「死んだ人たちの分も生きなくては」という思いが胸をつくようにして起こり、それは今も私の胸の中にあります。

思えば、大竹港入港の前夜、江田島の裏に船が投錨した時、満天の夕焼けでした。あとにも

先にも、あんな凄まじい夕焼けは見たことがありません。くれないと水色の彩りに黄金の輝き加わって、五彩とか七彩どころではありません、パレットにあらゆる絵の具をぶちまけたような華麗な夕焼けに、海を余り見たことのない富山、石川の山国出身の兵たちは、上甲板に正座して皆泣いていました。

生きて母国に帰れたよろこびもさることながら、お念仏の信心を忘れたことのない彼らは、この夕焼けの海を「お浄土」と感じたのに違ひありません。

この黄金の海の中で私は、「ああ私の両親も家族も、みんなお浄土へ行ってしまったのだな」と直感しました。この予感、次の日上陸し、広島の廃墟の中を歩いて本照寺の廃墟の中に立った時、真実だったことがわかりました。それか



らもう五十年もたってしまったのですね。

五

十年の間に、いくつか美しい夕焼けを見ました。高山の野を歩いていた時、唐招提寺で夕暮れを迎えた時、野辺山の標高千五百メートルの高原の山荘で眺めた夕焼け、比叡山観光ホテルで家内と共に眺めた全天紫の夕焼け、そして赤道を越えてニューギニア、ラバウル、マダン、ガダルカナルに向かった船の旅の朝夕、全天が紅に燃えた夕焼け、インドへ向かう飛行機の上から、地平線をおおって横に長くなびいていつまでも輝いていた真紅の夕焼け。「お浄土は西にあるのですね」と呟いたあるひとの声が忘れられません。

私は死を迎えるときと、真紅の夕焼け空を見、その中に消えてゆくような気がしてならないのです。

（正眼短大副学長・真如会主幹）



●昨年四月の改裝号以来、「テレビキヤスターの目」などで連載をいただいた利根川裕氏は、本号を以て終了となりました。とかく、抹香臭いと不評を買いちな宗教雑誌にはしたくない、という編集方針に、かつて中央公論社にも在籍された利根川氏も深い理解と共感を示され、多忙な中での執筆を快諾されたことでした。前にもご紹介したとおり、十余年間のキヤスター生活と訣別された氏は、現在、新潟の新設大学の副学長として活躍されています。当初の、一年間という約束を超えての寄稿に対し、心から、ありがたく厚くお礼を申しあげたいと思います。

●昨日の東京は、午後一時すぎに三十九度一分という観測史上最高の温度を記録しました。連日の猛暑で地表もかなり暖められており、最高気温が三〇度を割って過ごしやすくなるのは九月に入ってから、というのですから驚きです。皆さまがお住まいの地方も多分、例外ではないと思いますが、いかがお暮らしてでしょうか。そして、そんな酷暑の八月といえば思い出されるのが五十年前の八月十五日、つまり日本の敗戦記念日です。あの日を生きて迎えられる方々には、みなそれぞれの記憶が、ありになることと思いますが、今月の紀野一義氏の文章はまさにそうした記憶の鮮烈な一例です。

●猛暑と並んで、日本列島の話題はもっぱら水不足のこととなりました。実際、台風がこれほど期待されるようになろうとは夢にも思わなかったというのが実感です。そして、改めて生物にとって水がいかに貴重な資源であるかを教えられた気もいたします。極端な水不足に悩む四国へ各地から、名水ボトルが、続々と寄贈されているニュースに、それがたとえ若干のPR効果を狙ったこととしても何やらホッとする思いもいたしました。ただし、一ダースとなるかなり重量もかさむはずですが、それを配送するアルバイトとおぼしい女子高生の汗まみれの姿には少々複雑な気にもなったのでした。

●日本が、政治や経済の面もふくめて常態になるのは、いったいいつの日になるのでしょうか。一部の人は、昨年以来の米不足の折にも、これは自然を侮り、自然をさんざん痛めつけた天罰だと極言されましたが、果たしてこんな天候異変も、やはり天罰としかいようがないのでしょうか。

編集室

(編集チーフ)
編集スタッフ

小川有順
栗田順一
齋藤晃道
長谷川信潤
村田洋一
太田正孝
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめで購入希望の方は、一部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を差入いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 九月号

頒価六百元
年会費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成六年 八月二十五日
発行 平成六年 九月 一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 株式会社 文化カラー印刷
写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会
電話 〇三(三三)五七八 六九四七
FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六



S★PPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール

カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

人間のやさしさをクルマに。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を築く最大の基盤は、その姿とかがちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO:セドリックV30ツインカムターボ プロラム
VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(%)主

な装備 ●VG30DET(V6ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したも
のです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232お近くのローレル販売会社へ。